

「ネットを支えるオープンソース」要約

プロジェクトマネジメントコース 矢吹研究室 1442043 川崎貴雅

私が読んだ作品はまつもとゆきひろ氏監修のネットを支えるオープンソースです。この本は2部構成となっており、第1部のプログラミングが全てを作ったという題で序章含め5つ章から成り立っています。この5つの章の流れとしてはインターネットとソフトウェアの関連について序章と1章で基本的なところの大まかな説明がなされています。そして次に2章と3章でプログラミングとは何か、またその教育はどういう物なのかどうなっているのかについて、4章ではプログラマに必要な素養と思考方法について書かれています。また5章から7章から構成されている第2部はオープンソース化が高めたネットの価値という題となっています。題名にもあるオープンソースに関する記述が多くなっています。5章ではソフトウェアライセンスやオープンソースソフトウェアの現状やそのライセンスについて説明がなされている章です。6章、7章では企業やブラウザーなどを例にオープンソースソフトウェアに関する事が書かれているという流れになっています。では章ごとに具体的な内容を書いてみます。まず序章についてこの章ではプログラマが認識しているレベルの話から解説をしている。内容としてはアプリがどのように起動しているのか、どのような仕組みで動作をさせているのかなどからサーバーはどうやって端末を識別しているのかという内容から始まり、次はプログラミング関連の話でソースコードを機械語に翻訳する方式、言語自体の種類などの内容となっています。またプログラミング言語がどのような進化をしているのかまたプログラミングには向き不向きがあることなどについての説明もありました。序章の最後にはオープンソースの重要性について書かれています。なぜ重要なのかというとソースコードを読むことによるノウハウの伝達や教育に対して大きい効果を持っていると記述されています。また現在複数の商業ソフトウェアでも少なくはない数がオープンソース化し、ソースコードを公開して、逆に外部開発者からの貢献を募る場合も多いと記述されています。序章は1章から3章の内容を含んでいるため割愛します。第4章では

ハッカー精神とは何かという題になっていますがここでのハッカー精神とはプログラミングを楽しんでいる。または純粋に手早くプログラミングができる、特定のプログラミングのエキスパートやそれを生業にしている人のことを言います。世間というところのサイバー犯罪者の指すハッカーのことはクラッカーと言います。このことを踏まえてコンピュータについての話は進んでいき1971年にPCという形になったと説明がなされています。そして話はハッカー倫理について説明がなされています。内容としてはハッカーの価値観などの話で、情報は全て自由に利用できなければならない、コンピュータは人生をよいほうに変えうるなどのほかにも4つほどあります。第5章ではソフトウェアライセンスはユーザーに対して何らかの制限を設けてソフトウェアの使用・利用する許可を与える仕組みがソフトウェアライセンスである。またこのようなライセンスが必要な理由はソフトウェア自体に著作物という扱いになっているからです。またこの例として上がっているのがWindows PCやApple Store等が本作品でも上がっています。OSSライセンスはOSDというオープンソースの基準に合致している物の事をいいます。OSDはOISが定めた10項目を満たしたソフトウェアライセンスで配布されているソフトをOSSとして扱う。とあるためOSSの定義としてはOSSライセンスがOISの10項目を満たしていることが重要となるみたいです。またOSSライセンスを採用することの狙いは主にたくさんの人に使われたい、製品の質向上機能拡張を低コストで行いたいなど観られます。第6章ではオープンソース化が生んだ変化という題だがここではブラウザー戦争を例に挙げて説明している。具体的な例を挙げればブラウザー戦争での開発競争の影響でプログラミング内にゴミだらけな状況を改善するためにオープンソース化し外部の力を借りながら整理出来るのではという思惑があったのではと推測されています。最後に第7章ではAppleのウェブのレンタリングエンジンなどを例に企業とオープンソースに関して説明されています。